

ひょうご
—神と伝—
伝説紀行

おこった氏神様
たび重なるお祈りの結末

伝説

おこった氏神様
たび重なるお祈りの結末

紀行

赤穂岬の伝説と風土

- ・ 赤穂浪士の里の伝説
- ・ 地名に残る海岸線
- ・ 赤穂城下を訪ねる
- ・ 坂越湾に浮かぶ島

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

おこった氏神様 たび重なるお祈りの結末

むかしむかし、大津（おおつ）は小さな貧しい漁村でした。村人は、朝早くから夜おそくまでいっしょうけんめいに働きましたが、暮らしは少しも楽にはなりません。

「もう少し楽に暮らせるように、氏神様（うじがみさま）をお願いしたらどうだろう」

村人たちはそう話し合って、氏神様のお社をお願いしにゆくことになりました。

「どうか、魚がたくさんとれるようにしてください。魚が売れたら立派なお社を建てますから」

みんな頭を下げて、氏神様をお願いしました。するとそれからというもの、漁へ出るたびに大漁です。暮らしは、どんどん豊かになりました。氏神様のお社も、立派なものを造ることができました。



「暮らしは楽になったけど、さびしい村のまんまじゃなあ」

「もっとにぎやかな町になったら、いいのになあ」

そこで村人たちは、また氏神様をお願いをしました。

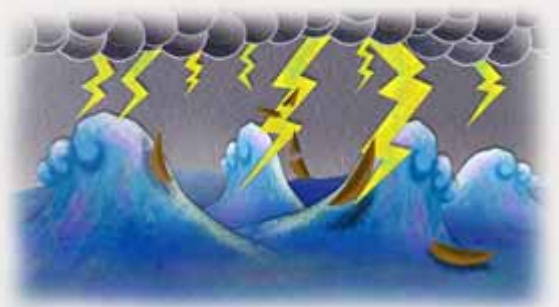
「どうか、大津をにぎやかな大きい町にしてください。そうすれば、氏神様のお祭りを、もっと盛大にいたしますから」

村人たちは、毎日毎日、氏神様をお願いしました。

そのうちに、大津の港にはたくさんの船が来るようになり、やがて「大津千軒（おおつせんげん）」と呼ばれるほどたくさんの家や店が建ち並んだ、にぎやかな港町になりました。氏神様のお祭りも、あちらこちらから見物人がやってくる、大きなお祭りになりました。

ある年のことです。ものすごい大嵐（おおあらし）が村をおそいました。港につないであった何十そうもの船が、大波でこわれてしずみ、たくさんの村人が亡くなりました。悲しんだ村人は、また氏神様の所へ行ってお願いしました。

「氏神様、このような嵐がくる海で働くのはもういやです。どうか、漁師をしなくても暮らせるようにしてください」



村人たちは前よりももっと熱心に、お祈りをしました。そうするとまもなく大雨が降って、あふれた大津川が川上から運んできた土で、大津の港はうまってしまいました。ところが、その土はたいへんよく肥えていましたので、田畑を作ることができるようになりました。

「これはありがたい。これからはみんなでひゃくしょうをして暮らせるぞ」
村人たちは喜んで、力をあわせて田畑を耕すようになりました。

数年がすぎると、村人たちはまた氏神様の所にやってきてお願いをしました。

「氏神様。おかげさまで、漁師をしなくても暮らせるようになりました。でも、年に一回のお米だけでは、年貢（ねんぐ）を納めると食べていだけでせいっぱいです。このままでは氏神様のお祭りもできません。どうか、年に二回、米ができるようにしてください」

それからというもの、大津では年に二回、米がとれるようになりました。村人は大喜びです。氏神様にお願いした年が羊年だったので、二度目にとれるお米を「羊米（ひつじまい）」と呼ぶようになりました。一度目にとれたお米から年貢を納め、残ったお米は売って、そのお金でにぎやかなお祭りをすることができます。そのうえ二度目の羊米は、みんなで分けあうことができます。羊米は、一度目のお米よりも少し味が悪かったのですが、それでも、ふだん稗（ひえ）や粟（あわ）ばかり食べていた村人たちにとって、米が食べられるということは、ほんとうにうれしいことでした。



ところが、そのうちに、おいしいお米を氏神様に差し上げるのが、だんだんおしくなってきました。

「こんなうまい米を、年貢で納めてしまったり、氏神様に差し上げたりするのはおいしいの。最初の米をわしらが食べて、羊米を年貢に混ぜることにしよう」

「氏神様のお祭りも、羊米を売ったお金でやればよかろう」

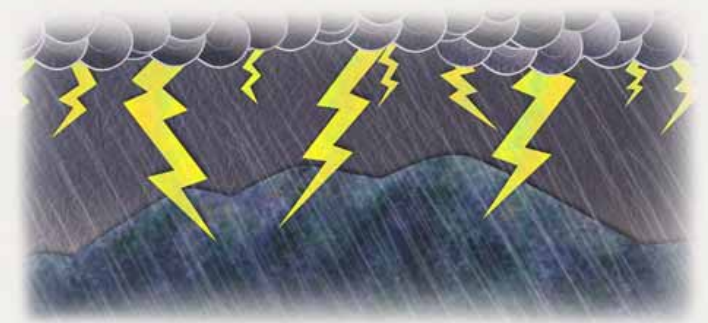
羊米は、一度目にとれたお米ほど高い値段では売れません。それからというもの、大津の祭りは、少しさみしくなりました。

何年か経つと、村人たちはもっとぜいたくな暮らしをするようになりました。

「羊米を売ったお金でお祭りをするよりは、わしらがもっとうまいものを食って、楽に暮らすようにしよう」

こうして大津の村人は、ほかのどの村よりもぜいたくな暮らしをするようになり、氏神様のお祭りもやめてしまいました。もちろん、氏神様にお願いした昔のことも忘れてしまったのです。そしてある年、大風でお社がこわれたことも知らず、ぜいたくな暮らしを続けていました。

とうとうおこった氏神様は、黒鉄山（くろがねやま）のおくへいってしまいました。そして、大水を出して黒鉄山の土と石を大津の田へ流し、大津村の田畑を全部うめてしまったのです。そんなことがあって、大津村のお米は、年に一回だけしかとれなくなったということです。



おこった氏神様 たび重なるお祈りの結末
おわり

紀行「赤穂岬の伝説と風土」

赤穂浪士の里の伝説

播州赤穂（ばんしゅうあこう）と言えば、思い出すのは「赤穂浪士（あこうろうし）」である。この史話そのものも伝説に近いものがあるが、そこからさまざまな伝説が派生してもいる。江戸時代に実際にあった事件も、テレビドラマや映画などで、ずいぶんいろいろなイメージが刷り込まれて、史実の輪郭はしだいにわかりにくくなっている。史実は、後世の人たちの思いが投影されて、伝説との間をゆれ動いてゆくのだろう。

それとは別に、赤穂の地には古くから残る伝説も少なくない。そのお話の一つを入り口にして、穏やかな瀬戸内の海、清流千種川（ちくさがわ）の河口に開けた平地と、背後にひかえる緑の濃い山々に抱かれた赤穂を歩いてみた。

伝説で取り上げた大津村は、赤穂市中心部から北東に4kmほど離れた場所にある。大津川という小さな川が、地区の中央を流れて赤穂港に注いでおり、海岸までも大体同じくらいの距離だろうか。大津でいちばん大きな神社は大津八幡神社であるから、これが伝説で語られた「氏神様」だろうと考えて訪ねてみた。

地名に残る海岸線



大津八幡神社（参道）大津八幡神社（石碑）

大津八幡神社は、和気清麻呂（わけのきよまる）にゆかりが深いと伝えられている。和気清麻呂が、称徳天皇の勅命を受けて宇佐八幡宮に向かう途中、大津の港に立ち寄ったということで、その船をつないだ松があり、また清麻呂が帰路にも立ち寄って、宇佐八幡宮より勤請したのが現在の大津八幡宮であると伝えられている（『播州赤穂郡志（ばんしゅうあこうぐんし）』）。

村の中の細い道を通って階段を登ると、広い境内の奥の一段高い場所に、堂々とした風格のある拝殿が建っている。訪れたときはちょうど秋祭りであったようで、赤と青の幟（のぼり）が立てられていた。境内からは海までを望むことができるけれど、伝説に言うとおり、「かつて大津が港だった」のであれば、ほんの目と鼻の先が海だったのだろう。

黒鉄山は、八幡神社の北西に望むことができる。高くはないが、重厚な印象を受ける山並みの手前に、三角形の一段高い山頂を見せている。



大津八幡神社（鳥居） 鳥居としめ縄

今は海岸から4kmも離れている大津が港町だったというのは、にわかには信じられないような気もする。しかし大津という地名は、「大きな港」そのものの意味である。大津八幡神社の南方には西から張り出す尾根があって、その先が大津川に接しているのだが、この付近には「船渡（ふなと）」という地名が残っている。さらに国土地理院の地図をよく見てみると、現在の大津川は、この船渡あたりから平野の中央を通らず、不自然な感じで山すそを巻くように流れて赤穂港に達している。船渡の東には、「古浜町」、「磯浜町」、「片浜町」などという地名が並んでいて、このあたりに古い海岸線があったことを想像させる。

こうしたことを考え合わせると、いつのころかはわからないにせよ、かつては船渡の近くまで入り込む湾があったと考えても、大きな間違いではなさそうである。それが大津川の氾濫（はんらん）などにともない、しだいに埋まって海岸平野となり現在に至ったのであろう。伝説の中で、黒鉄山から土砂が流れて港が埋まった、あるいは田畑が埋まったとされているのは、海が埋まってゆく過程で起きた、古い災害の記憶をとどめているからではないだろうか。

災害の記憶を後世に伝えたい、さらには人の心がおごることをいさめたい。昔の人のそんな思いがこの伝説を生んだと考えるのは、飛躍しすぎだろうか。



大津八幡神社（境内）



祭の幟



夕暮れが迫る



黒鉄山（遠景）

赤穂城下を訪ねる



大手門



石垣

東西を千種川と大津川に挟まれ、北側を雄鷹台山（おたかだいやま）にさえぎられた三角形の平地に発達しているのが、赤穂市の中心部である。赤穂浪士で名高い赤穂城も、この三角形の平地の先端付近に築かれた城であった。

赤穂城の北にある花岳寺（かがくじ）は、元は浅野氏の菩提寺（ぼだいじ）として建立された寺院で、赤穂義士もここに祭られている。城跡から北へ、城下町の面影をとどめた細い通りを入ると、いちばん奥に、大きくはないが雰囲気のある山門が建っている。この山門は、赤穂城の塩屋総門を明治になってから移設したもので、市の文化財に指定されている。



日本真景播磨・垂水名所図帖



西海航路図巻



花岳寺（門）



花岳寺（看板）



花岳寺（境内）



本堂の生け花

玉砂利を敷いた明るい境内には、大きく枝を張った「大石良雄なごりの松」も残る。ただしこれは2代目で、大石自身が植えたという初代は、昭和初期に枯れてしまい、現在ではその切り株だけが保存されている。



鳴らずの鐘



水琴窟

この松の隣にあるのが「鳴らずの鐘」である。赤穂義士の切腹という悲報を聞いた人々が花岳寺に集まり、弔いのためにこの鐘を打ち続けたという。あまりにも打ちすぎて音色を出し過ぎたためであろうか、その後、この鐘は打っても鳴らなくなってしまい、「鳴らずの鐘」と呼ばれるようになったという。



日本真景播磨・垂水名所図帖
（忠義塚）



播州赤穂城下台雲山
華岳禅寺全図
（義士の墓）

こうした伝説によって、太平洋戦争中も「義士にゆかりの鐘」ということで、供出を免れたというから、伝説が文化財を守ったとも言えるだろう。ただ語り継がれただけの事柄でも、時には不思議な働きをすることがあるのだ。

坂越湾に浮かぶ島



随神門



大避神社

赤穂市街から国道250号線を通って千種川を渡り、坂越橋東の交差点から東へ道をたどると、すぐにトンネルをくぐって坂越（さこし）の町に着く。こども広い湾に面した、古い港町である。湾の奥に、ぼつんと浮かぶのが生島（いくしま）である。坂越の町中にある大避神社（おおさげじんじゃ）は、元はこの島に祭られていたとのことで、現在でも毎年秋におこなわれる、坂越の町と生島の間を、神輿（みこし）を船に積んで渡る祭り、「船渡御（ふなとぎょ）」がおこなわれている。



生島全景



大避神社



祭の幟が立つ

これほど陸に近い島でありながら、生島にはほとんど自然林と言っていいような森が残っている。古くから、この島の木を切ったり、落ち葉を拾ったりするとたたりがあるという伝説があったためのである。

生島の照葉樹林は、スタジイやウバメガシをはじめとする自然林から構成され、植物分布上重要なものとして、天然記念物に指定されている。神域として何百年も守り続けられた森は、何世代も引き継がれてきた遺産そのものであろう。穏やかな海に浮かぶ森に夕日が射す光景をながめていると、今の時代は、いったい何を未来に残せるだろうかという思いがわいてくる。



播磨名所巡覧図絵

用語解説

赤穂浪士（あこうろうし）

赤穂義士（あこうぎし）とも呼ぶ。元禄15（1702）年に、吉良義央（きらよしひさ）を襲って、主君浅野長矩（あさのながのり）の仇（あだ）を討った、元赤穂藩士の47名のこと。この事件は「元禄赤穂事件」と呼ばれ、後には事件を題材とした『仮名手本忠臣蔵』をはじめとする小説、芝居などに取り上げられて人気を博した。

千種川（ちくさがわ）

兵庫県の播磨地域西部を流れ瀬戸内海に注ぐ河川。鳥取県境にある三室山南麓に源流をもち、延長は67.6km、流域面積は752平方キロメートル。河口には赤穂三角州が発達する。上・中流域に大規模な都市がないため、良好な水質が維持されており、兵庫県を代表する清流とされている。

大津八幡神社（おおつはちまんじんじゃ）

赤穂市大津に所在する八幡神社。和氣清麻呂が九州の宇佐神宮から勧請（かんじょう：神仏を分けて別の地に祭ること）したとされる。大津八幡神社の木造菩薩立像は、赤穂市指定文化財。

和氣清麻呂（わけのきよまる）

奈良時代末～平安時代初頭の公卿（733～99）。従三位。769年、僧道鏡が皇位を奪おうとした事件の際、宇佐八幡宮の神託をもってこれを退けた。そのため大隅（鹿児島県）に流されたが、道鏡の失脚後に復権。桓武天皇（かんむてんのう）の信任を得た。

称徳天皇（しょうとくてんのう）

奈良時代末の女性の天皇（718～70）。第46代の孝謙天皇（こうけんてんのう）として在位した後、淳仁天皇（じゅんにんてんのう）に譲位したが、藤原仲麻呂の乱の責めによって淳仁天皇を退位させて、再度第48代天皇として即位した。その後、天皇に寵愛された僧道鏡が実権を握り皇位を奪おうとしたため、これに反対する貴族が、和氣清麻呂を宇佐八幡宮に派遣して、神託を得るといった事件が起こった。

宇佐八幡宮（うさはちまングう）

大分県宇佐市に所在する神社。正式には宇佐神宮。八幡神社の総本宮とされる。社伝によれば725年に創建されたといい、第一位の祭神を応神天皇とし、以下、比売大神（ひめのおおかみ）、神功皇后（じんぐうこうごう：仲哀天皇の皇后で応神天皇の母）を祭る。八幡造（はちまづくり）と呼ばれる建築様式の本殿は国宝。

黒鉄山（くろがねやま）

赤穂市西部にある山。標高は430.9m。頂上からは、瀬戸内海方面の眺望が開ける。

用語解説

赤穂城（あこうじょう）

赤穂市上仮屋に所在する江戸時代の城。別名を蓼城（たでのすじょう）という。国史跡。赤穂三角州上にある、典型的な平城である。室町時代から安土桃山時代にかけて、同地には加里屋城、大鷹城があった。縄張りは変形輪郭式。本丸と二の丸が輪郭式に配され、その北側に三の丸が梯郭式に置かれている。天守台は設けられているが、天守閣は建築されなかった。縄張りは甲州流兵学者の近藤正純。

花岳寺（かがくじ）

赤穂市加里屋に所在する曹洞宗の寺院。台雲山（たいうんざん）と号する。歴代赤穂藩主の菩提寺。浅野長直（あさのながなお）が、藩主として常陸笠間から赤穂に移った際に建立した。浅野長矩（あさのながのり）の切腹によって浅野氏が断絶して後は、永井氏、森氏の菩提寺となった。大石良雄をはじめ、赤穂義士ゆかりの遺品を多く残す。

浅野氏（あさのし）

浅野氏は、もと常陸国笠間を領したが、1645年に赤穂へ転封され、以後1701年までの間、長直（ながなお）、長友（ながとも）、長矩（ながのり）の三代にわたり赤穂藩主をつとめた。長矩は1701年に、江戸城内で刃傷事件を起こして切腹。浅野家は断絶した。

菩提寺（ぼだいじ）

先祖代々の墓を置き、葬式や法事をおこなう寺。

大石良雄（おおいしよしお）

赤穂藩の家老（1659～1703）。内蔵助（くらのすけ）は通称。藩主浅野長矩（あさのながのり）が、江戸城内で吉良義央（きらよしひさ）を負傷させた事件で切腹を命じられた後、浅野家再興を図ったが受け入れられなかった。長矩切腹の翌年、赤穂浪士46人とともに、江戸本所にあった吉良邸に討ち入り、義央を殺して主君の仇（あだ）を討った。

生島（いくしま）

赤穂市東部の坂越湾（さこしわん）にある島。島内の樹林は、対岸にある大避神社の森として長く保護されており、スダジヤやアラカシ、タブノキなどが繁茂する暖地性の自然林となっている。植生の重要性から、瀬戸内海国立公園の特別保護区および国の天然記念物に指定されている。

大避神社（おおさけじんじゃ）

赤穂市坂越（さこし）に所在する神社。創建年代は不詳であるが、鎌倉時代には有力な神社であったとされる。祭神は天照大神（あまてらすおおみかみ）、春日大神（かすがのおおかみ）、大避大神（おおさけのおおかみ）。大避大神とは、秦氏の祖先である酒公（さけのきみ）と秦河勝（はたのかわかつ）である。元は大酒社（おおさけのやしる）と呼ばれ、坂越湾内の生島に祭られていた。例祭は瀬戸内三大船祭りの一つに数えられ、2艘（そう）の小船に神輿を乗せて船渡御がおこなわれる。

用語解説

コヤスノキ（こやすのき）

トベラ科トベラ属の常緑低木。学名はPittosporum illicioides。中国中部、台湾にも分布する。明治32年に、揖保郡（いぼぐん）新宮町において大上宇市（おおうえういち）が発見し、牧野富太郎（まきのとみたろう）が新種として発表した。

チトセカズラ（ちとせかずら）

マチン科ハウライカズラ属のつる性木本。学名はGardneria multiflora。日本、中国に分布するが、国内での分布は中国地方と琉球列島に限られ、兵庫県は分布の東限にあたる。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	赤穂の昔話	1986	赤穂民俗研究会	赤穂市教育委員会
歴史・文化	兵庫のふるさと散歩3 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	赤穂市史第一巻	1981	赤穂市史編さん専門委員会編	赤穂市
	赤穂市史第二巻	1982	赤穂市史編さん専門委員会編	赤穂市
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	赤穂の地名	1985	赤穂市総務部市史編さん室編	赤穂市
	播磨伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター
その他	原色日本植物図鑑木本編	1979	北村史郎・村田源	保育社

所在地リスト



大津八幡神社
黒鉄山
赤穂城
花岳寺
生島樹林

大津八幡神社	赤穂市大津1060
黒鉄山	赤穂市西有年
赤穂城	赤穂市上飯屋1424ほか
花岳寺	赤穂市加里屋1992
生島樹林	赤穂市坂越字生島335-1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第2刷 2009年4月1日